

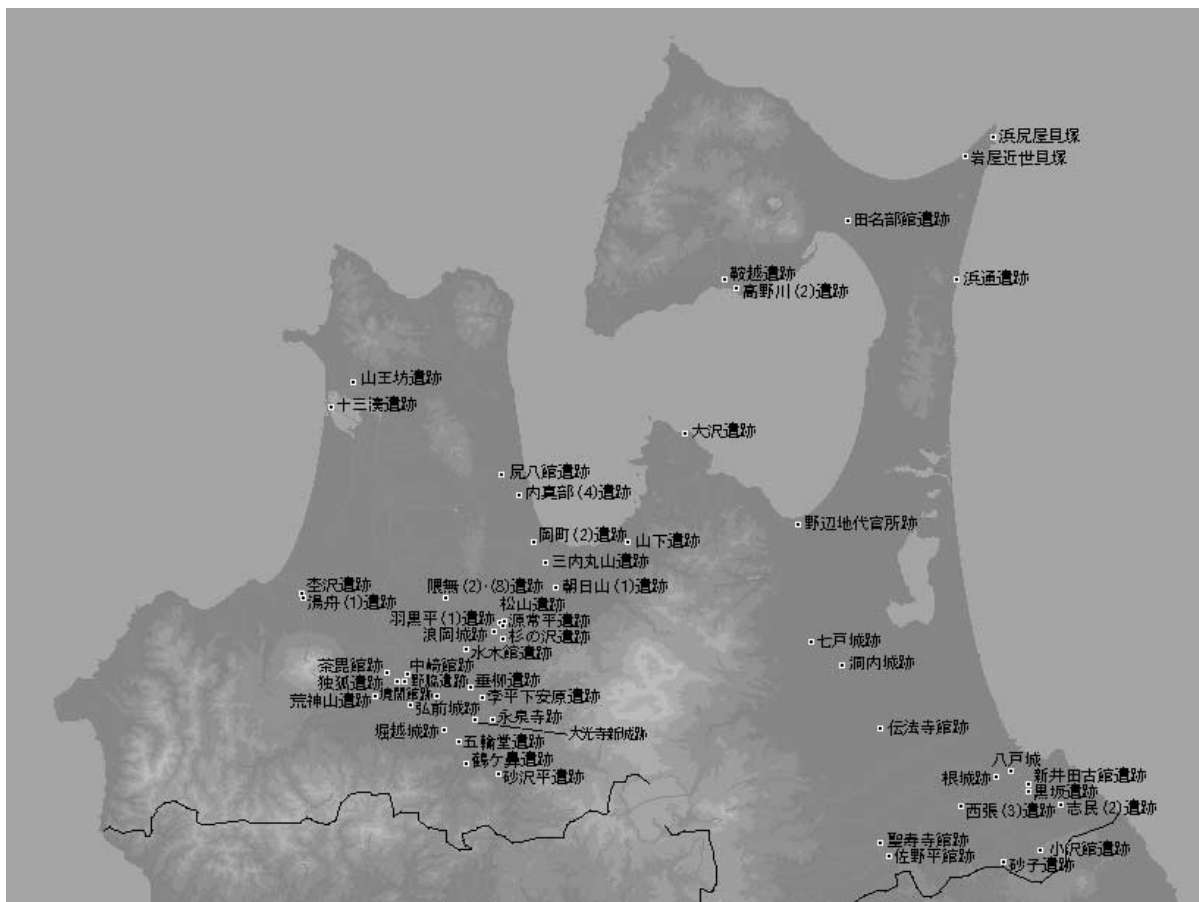
中世・近世

平山明寿

はじめに

中世・近世という時代は、東北の歴史の中でも近年、注目されつつある時代でもある。文献資料の新しい分析によって、今まで見えなかった歴史の側面が明らかにされつつあるが、考古資料ではどうであろうか。ここでは、12世紀～16世紀を中世、17世紀～19世紀中頃までを近世として、以下の①～③に主題を絞ってまとめてみたい。

- ①城館・集落・都市
- ②墓制と信仰
- ③生産と流通



遺 跡 一 覧

中 世

- ①城館・集落・都市

たいていの人が、中世の遺跡と聞いて思い浮かべるのは城館遺跡でないだろうか。遺跡・遺構が目に見える数少ない例であるとともに、この時期の調査の主流でもある。また、地域の象徴的な存在といった側面もあるのかもしれない。

当センターで調査した城館は、南部地域では階上町小沢館跡・十和田市伝法寺館跡・十和田市洞内城跡・南部町佐野平館跡・むつ市田名部館跡がある。また、津軽地域では弘前市中崎館跡・弘前市境関館跡・青森市内真部（4）遺跡・弘前市茶毘館跡・弘前市独狐遺跡・大鰐町砂沢平遺跡・浪岡町源常平遺跡がある。地形的な特徴もあるが、南部地方の調査例では山城が多く、津軽では居館・平城が多い。また、自然地形を利用した小さな館の集合体で、曲輪規模が大きく、戦時と日常の両方の性格を併せ持った「館屋敷型」のものが^(注1)多い。城館の外側は堀・土塁・溝といった遺構が巡り、内側は掘建柱建物跡・竪穴遺構・土坑・井戸・カマド状遺構といった遺構や、ときには切り通しや平場といった整地痕跡も検出される。センターの調査例の他にも、各市町村教育委員会などによって、青森市尻八館跡・浪岡町浪岡城跡・八戸市根城跡・弘前市堀越城跡・七戸町七戸城跡・南部町聖寿寺館跡・平賀町大光寺新城跡・川内町鞍越遺跡などの城館が調査されている。

集落遺跡は、東通村浜通遺跡・川内町高野川（2）遺跡・青森市朝日山（1）遺跡などが調査されている。浜通遺跡は16世紀後半～17世紀初頭の短期間しか営まれなかった集落である。高野川（2）遺跡からは、15世紀後半頃の寝殿造りの系統に属する住宅建築が、朝日山（1）遺跡からは四面庇の掘建柱建物跡が検出されている。尾上町李平下安原遺跡・浪岡町杉の沢遺跡・弘前市野脇遺跡・青森市岡町（2）遺跡などからも、中世の溝や井戸が検出されているので、これらも集落の一部と思われる。また、遺構は検出されていないが、田舎館村垂柳遺跡では中世の堆積層が確認されている。

都市は、安藤氏の拠点と考えられる市浦村十三湊遺跡^(注10)が調査されている。この遺跡からは、居館や港湾施設などの他に、中軸街路を中心に町屋が並ぶ都市配置が検出されている。

②墓制と信仰

墓の形態には、土坑墓と塚墓がある。土坑墓は、平賀町五輪堂遺跡・浜通遺跡・十三湊遺跡などから検出されている。土坑墓は、そのほとんどが土葬と思われる。ただ、五輪堂遺跡では火葬骨が納められていた。また、浜通遺跡では土坑墓の底面が焼けていた。これは、茶毘に附した遺体をそのまま埋葬したものと考えられることから、埋葬方法にも種類があることが窺われる。また、根城跡などからは、いわゆる「鉢かむり」の土坑墓が検出されている。なお、瀬戸四耳壺など、骨臓器と思われる陶器が出土しているが、伝世品がほとんどで埋葬形態は不明である。塚墓と思われる塚は、岩木町荒神山遺跡^(注12)で100基近く検出されているが、全てが墓でなく、一部、供養や信仰的な塚の可能性も指摘されている。

調査で見つかった石造物には、板碑が境関館跡・茶毘館跡・大鰐町鶴ヶ鼻遺跡から、五輪塔が尾上町永泉寺遺跡から出土している。板碑は境関館跡では井戸、茶毘館跡では溝の中から出土し、鶴ヶ鼻遺跡では近世墓の墓標に転用されていた。

寺院跡の可能性のある遺構には、市浦村山王坊跡^(注13)の建物跡が指摘されている。

宗教道具は、根城・浪岡城・大光寺新城から金剛杵などが出土している。また境関館跡から銅鏡が入子状になって検出された。

一括出土銭は津軽地域から数多く検出されているが、発掘調査されたのは浪岡城跡など数例である。

③生産と流通

竪穴遺構は、根城跡・浪岡城跡といった城館遺跡から特に多く検出されており、韃の羽口や埴塙・小札などが出土する例が多いことから、工房や貯蔵施設といった用途が考えられている。カマド状遺

構は境関館遺跡・浪岡町羽黒平（1）遺跡・青森市山下遺跡などで検出されている。境関館遺跡では129基と特に多く検出されており、屋外に設けられた厨房施設と考えられている。その他に、畝状遺構が十三湊遺跡から、アワビ漁を主体とした貝塚が東通村浜尻屋貝塚から、道路跡が浪岡町松山遺跡から検出されている。この道跡は、旧大豆坂道と部分的に重なっている。

県内の陶磁器の出土様相は工藤清泰氏によって指摘されている。^(注14) 下駄や木椀といった木製品は、独狐遺跡のように井戸から出土する例が多い。そのほかに注目される遺物は、火縄銃の火挟みが浪岡城跡・聖寿寺館跡から、茶臼が尻八館跡・根城跡・浪岡城跡から、煙管が浜通遺跡などから出土している。また、アイヌ遺物である矢の中柄が浪岡城跡・浜尻野貝塚・聖寿寺館跡から出土している。

近 世

①城館・集落・都市

この時期の遺跡や遺構は調査される機会が少ないため、詳細が分からないものが多い。特に建物跡は検出例が少ないのが実状である。

調査された城館は、弘前市弘前城跡・八戸市八戸城跡^(注16)がある。また、野辺地代官所跡も調査されているが、主体となる建物跡は検出されていない。^(注18)

集落跡は、農村集落が野脇遺跡・五所川原市隈無（8）遺跡で調査されている。特に隈無（8）遺跡は下の切街道沿いに面した農村集落として注目される。内真部（4）遺跡・常盤村水木館跡・青森市三内丸山遺跡・伝法寺館跡・岡町（2）遺跡からもこの時期の土坑や溝が検出されている。これらの遺跡では、建物跡が検出されていないが、集落の一部と考えたい。

この時期の都市の調査例は残念ながら、一港町と変化した十三湊遺跡から、建物跡や井戸などが検出されている。

②墓制と信仰

近世の墓は、検出数の割に報告例が少ない。鶴ヶ鼻遺跡はその数少ない例の一つである。これは宿川原を見下ろす高台に位置した火葬墓群で、集落の共同墓地と思われる。また、火葬場跡は、五所川原市隈無（2）遺跡・七戸城跡から検出されている。土葬墓の検出例は階上町志民（2）遺跡・八戸市新井田古館遺跡などがある。新井田古館遺跡ではアイヌの特徴を持った人骨が検出されている。このような例は、太平洋側の遺跡から数例見つかっているだけである。

宗教施設は、神社の社殿と思われる建物跡が杉の沢遺跡から検出されている。これは、絵図に描かれた勝先沢のお宮と思われる。寺院跡の調査例は弘前城周辺^(注20)で多い。なお、宗教遺物は、燭台が永泉寺跡から出土している。

③生産と流通

地方窯製品は、悪戸焼や蟹沢焼などの操業が知られるが、調査例が乏しいため不明な点が多い。^(注21) ただ、瓦を生産した窯が八戸市黒坂遺跡から検出されている。炭窯は鰯ヶ沢町空沢遺跡などから、製塩の窯跡が平内町大沢遺跡^(注22)から、また、畝状遺構が十三湊遺跡・南郷村砂子遺跡などから検出されている。李平下安原遺跡の溝群も畑跡の可能性もある。道路跡は、松山遺跡や鰯ヶ沢町湯舟（1）遺跡から、水利関係の施設と思われる樋状遺構が野脇遺跡から検出されている。福地村西張（3）遺跡からは、溝跡に沿ってピット群が検出されており、牧場の柵列と思われる。その他にも、長崎俵物のアワ

ビを採取していた東通村岩屋近世貝塚^(注23)が知られる。

特記される遺物として、コンプラ瓶の破片が田名部館跡から、焼塩壺が弘前城と八戸城から出土している。また、離頭銚・骨銚・蝦夷刀・アイヌ玉といったアイヌ的遺物が、下北半島から太平洋沿岸にかけての地域から出土している^(注24)。表面採集されたものも多いが、これらの遺物から、本州アイヌの存在が指摘されているが、その集落の調査例ははまだない。

さいごに

中世・近世遺跡の調査例は残念ながらまだ少ない。そのため、文献資料に乏しい青森のこの時代の歴史は断片でしか窺うこしかできなが、今後の課題を三つ挙げて、全体をまとめてみたい。

Ⅰ．「なにをもって中世・近世とするか？」

ここでは便宜上中世を12世紀からとした。しかし、古代と中世の画期は、県内の考古資料ではまだ定まっていないのが実状である。これは、古代の土器編年がまだ確立していないこと、特に古代末期の遺跡の調査例が少なく、中世との連続性を追えないことや、中世遺跡の調査は城郭が多く、遺跡の性格が偏っているためである。近世も同様で、一般集落の調査が少なく、在地土器による編年が進んでいない。特に、地方窯の調査例がない。

また、ここでは敢えて年代や時代区分をしなかったが、最新の陶磁器研究の成果を使うことで、報告書の時期が変化する可能性がある。

Ⅱ．「南部・津軽・下北の差は？」

史跡整備による城館発掘はさかんな一方で、下北地域や沖積地に位置する遺跡の調査例が少ないといった、調査される遺跡・地域・地形に偏りが見られるため、特定の地域での連続性を追えない。県全体の復元も難しい。また、遺跡間の差違が認められても、それが地域差・年代差・性格差のどれかが分かりづらいものになっている。

Ⅲ．「江戸時代だから？」

近世の記録・記載例が少なく、遺物も肥前系磁器・寛永通寶・泥面子くらいで終始してしまう。遺構の年代も「近世以降」と漠然とした表記になりがちである。報告書のページ数の制約があるからといって、近世だから調査する必要もない・茶碗なんて報告しなくてもよいなどという考えは、すべきではない。青森でも磁器のことを「せともの」と呼んでいるが、近世末に出現した瀬戸・美濃系磁器が、どのような流通経路を辿って入って来たのだろうか。また、文献では津軽や夏泊、下北半島で本州アイヌ集落の存在が確認されているが、その形成や特徴、日本人との関係はどのようなのだろうか。近世もまだまだ解らないことが多いのである。

(青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)

図には、カシミール3Dと国土地理院刊行の数値地図を使用しました。